

平成21年6月11日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006年度～2008年度
 課題番号：18720240
 研究課題名（和文） ニヴフ民族の口承文学資料の再検討と生活史における位置づけの研究
 研究課題名（英文） Reexamine of Nivkh folk-stories and evaluation of them in the life histories
 研究代表者 丹菊 逸治 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 研究員
 (TANGIKU ITSUJI)
 研究者番号：80397009

研究成果の概要：

百年～数十年前にかけてピウスツキ、高橋盛孝らによって採録されたニヴフ語口承文学筆録資料、近年の音声資料の解読・分析をニヴフ語話者の協力を得ておこなった。その結果、各伝承が個人の生活史と密接な関連を持つことが判明した。話者が属する血縁集団、個人的な事件、最近の伝承では近代化との関わりがジャンルに応じた形で反映されている。話者自身もそれを前提とし、自分にふさわしいと意識する内容を取捨選択して語っている。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1300,000円	0円	1300,000円
2007年度	1100,000円	0円	1100,000円
2008年度	1000,000円	300,000円	1300,000円
年度			
年度			
総計	3,400,000円	300,000円	3,700,000円

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：ニヴフ（ニブフ、ニブヒ、ニヴヒ、ギリヤーク）、民族学、口承文学、文化人類学、生活史（ライフヒストリー）、少数民族、先住民、北東ユーラシア、言語学、音声資料、ピウスツキ、高橋盛孝

1. 研究開始当初の背景

(1) 過去の（博物館収蔵）資料原文の検討が行われていなかった。日本においては第二次世界大戦によって現地調査が不可能となり、研究が中断したためである。ソビエト連邦崩壊による研究資金の途絶と人材の海外流出による。そのため長期にわたって研究が縮小していた。その間にニヴフ語話者が急減したため、原文の検討が行われなくなっていた。

(2) 従来の研究においては、話者との共同作業が十分ではなく、生活史との関わりでの分析が行われていなかった。ソ連崩壊直前にはニヴフ語話者でもある研究者自身がロシア語訳を作成する、という方法をとっていたため、かえって「話者」「伝承者」という視点が不十分だったことも一因である。

(3) 伝承者（伝承）の状態がよくわかっていなかった。ソ連崩壊後もロシア内外の研究者によって断続的に調査が行われていたが、

ニヴフ民族居住地域全域での言語使用状況、口承文学の保存状況は詳しく調べられていなかった。

2. 研究の目的

(1) 過去に採録された口承文学の筆録資料原文の解説を行い、それによって採録状況等を分析する。

(2) 口承文学と生活史との関わりを分析する。

(3) 現代における口承文学を確認する。

3. 研究の方法

(1) 過去の筆録資料を現在の話者との共同作業により解説・分析する。少数の協力者との長時間作業（精読）、多数の協力者との短時間の作業による。限られた時間での調査となるため、PCによる現地での分析、作業状況の録音を同時に行う。

(2) 共同作業・聞き取り調査により、伝承と話者の関わり方を分析する。口承文学だけでなく、生活全体に関する聞き取り調査を行う。これもできるだけ録音をとる。

(3) 現代の語りを録音し、筆録資料を収集する。

4. 研究成果

(1) 資料原文の解説・分析を行った。それにより過去の資料の採録状況等が推測できた。語り手と内容・形式には密接な関係があり、話者が属する血縁集団、個人的な事件、最近の伝承では近代化との関わりがジャンルに応じた形で反映されている。話者自身もそれを前提とし、自分にふさわしいと意識する内容を取捨選択して語っていることが判明した。つまり生活史においては、父系リネヅ内における自分のあり方、個人の歴史を語る行為として口承文学全体が位置づけられている。解説・分析したのは以下の資料である。

- ①ピウスツキ資料（一部）
- ②高橋盛孝資料（刊行されたもの全部）
- ③アウステルリッツ資料（一部）
- ④サンギ資料（一部）
- ⑤その他の資料（一部）

(2) その諸相の一部は、語り手個人の略歴を交えて紹介した別冊報告書『ニヴフロ承文学の語り手たち』としてまとめた。

(3) 現代において、口承文学は重要な行為として変容しつつ行われ続けていることが確認できた。

(4) 国内外での位置づけについて。

本研究の成果は日本国内において、3つの点から評価しうる。

①ニヴフ研究において「口承文学と生活史の関わり」をテーマとした数少ない研究であること。

②戦前の日本人による「南樺太」での採録資料の再検討を行ったこと。すなわち日本における独自のニヴフ研究の継続であること。

③危機言語であるニヴフ語の話者との協力であること。そのために、貴重な現地調査による資料採録を伴っていること。

④日本国内の少数民族であるアイヌ民族に隣接するために、その比較研究となりうる。日本国外においては、次のような点から評価しうる。

⑤話者に重点を置いた数少ない研究であること。

⑥国外の研究者に比較すると調査滞在時間は短いが、ニヴフ語を用いた調査であること。国外の研究者は基本的にロシア語のみを使用しているので、この点は重要である。

⑦サハリン州・ハバロフスク州の両地域にまたがった研究であること。

⑧ロシア国内にあるニヴフ語原文による筆録・録音資料の解説可能性を示したこと。現在、ニヴフ語原文資料の整理ができる研究者は数少なく、具体的に作業を行っている例はほとんどない。

(5) 今後の展望について。

①本研究の調査過程で、これまで知られていない筆録資料・録音資料が存在することが確認できた。話者が急減しているため、これらの整理・分析は緊急性を要する。資金さえあれば可能である。

②アムール川河口地域では、従来報告されていない形式の口承文学が存在していたことが判明した。今後、ニヴフロ承文学研究はアムールの諸民族、アイヌ民族との関係を視野に入れた研究が必要である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

1. 2007 「ニヴフ語の植物名称：東方言を中心に」（水島未記、白石英才との共著、北海道開拓記念館研究紀要 第35号）

〔学会発表〕（計1件）

「V サンギ氏採録によるニヴフ語サハリン方言音声資料について」 北大文学研究科公開シンポジウム報告 2008年

〔図書〕（計3件）

1. 『ニヴフ語サハリン方言基礎語彙集（ノグリキ周辺地域）』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 2008年 p484
資料『フトククさんの昔話と体験談』（ヴラディミール・サンギ採録、ガリーナ・パクリナとの共著）東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 2008年 p65

2. 「ニヴフ文化の伝承者たち」『次世代を
はぐくむために (人文・社会科学振興のための
プロジェクト研究事業報告書)』所収 2008年
pp136-145

3. 『ニヴフ口承文学の語り手たち』(本研究
報告書) 東京外国語大学アジア・アフリカ言
語文化研究所 私家版 2009年 p109

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

その他、以下の科学研究費補助金報告書掲載
論文の資料の一部は本研究によるものであ
る。

2007 「ニヴフ語、アイヌ語、ウイльта語の
民具関連の共通語彙について」(中川裕編『ア
イヌを中心とする日本北方諸民族の民具類
を通じた言語接触の研究』平成 19 年 5 月
科学研究費補助金(基盤研究B)成果報告書)

また、東京外国語大学アジア・アフリカ言語
文化研究所のサイト内コンテンツ『北東ユー
ラシアの言語文化』のニヴフ関連資料の一部
は本研究によるものである。
<http://www.ling-atlas.jp/nivkh.html>

また、資料・研究成果の一部は研究代表者の
個人管理サイト(以下の URL)で公開されて
いる。

<http://sakhalin.daa.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

丹菊 逸治 (TANGIKU ITSUJI) 東京外国語大
学 アジア・アフリカ言語文化研究所 研究員

研究者番号：80397009

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：